始

高祖保
詩集

911.56
88
2

911.56-Ko88-2ウ
1200500756707

雪

詩集

911.56
Ko.88
2

帝國圖書館藏

雪

高祖保

詩集

918
239

Sine qua non

乖離(くわいり)

帝國圖書館藏

十月。秋神の即位。——金鶯(みそさざい)一羽、廢園のエルムの樹に通ひはじめる。

二

道傍の亞灌木にある、水禽の糞。

湖からあがる風が、弧を描いて、水霜の葉におちる。

三

青い鶫が食卓にのぼりだすと、聖餐式のやうに澄んだ夜ごとが、展ける……

手帖に一篇((天使園の薔薇))といふ詩を、書きとつた。それから、パピィニの自叙傳を讀んだ。そして、ひとりで眠つた。

「灰色の靴下を穿いた秋」が、わたしの精神の罅裂の隙き間から、潜りこんでくる。

四

靈感の屯。——たましひの寨。

五・

福音書的(エヴアンヂエリツク)とは、何といふことであらう。
海扇貝(いたや)にみえる、支那團扇。
かれが年老いたアナクレオンのやうに、雨に
うたれながら詩を吐き出す、——吐き出すこと
それは、一向エヴァンヂェリックではない。

六

(弗羅曼(フラマン))とよばれる、割烹店(レストラン)の中二階。孔雀
草の群落。
わたしは水馬齒(みづはこべ)を刻んで、それへ該里(シエリイ)の酒を
滴らせる。秋ばかりは、金いろの時間が、燠(おき)の
やうに燻(いぶ)つて。……

みづうみ

ほととぎす啼や湖水のささ濁り　丈艸

私は湖をながめてゐた
湖からあげる微風に靠(もた)れて　湖鳥(うみ)が一羽
岸へと波を手繰りよせてゐるのを　ながめてゐ
た

澄んだ湖の表情がさつと曇つた
湖のうへ　おどけた驟雨(スコール)がたたずまひをしてゐ
る
そのなかで　どこかで　湖鳥が啼いた

私はいく夜(よ)さも睡れずにゐた
書きつぶし書きつぶしした紙きれは
微風の媒介(つて)で　ひとつひとつ湖にたべさせてい
つた

湖　いな

貪婪な天の食指を追ひたてて
そして結句 手にのこつたものはなんにもない
白けた肉體の一部
それから うすく疲れた回教經典(コオラン)の一帙

刻刻に曉がふくらんでくる
湖どりが啼き
窓の外に湖がある
窓のうちに卓子(テーブル)がある

卓子のめぐり 白い思考の紙くづが堆く死んで
ゐる
ひと夜さの空しいにんげんの足掻きが のたう
つてそこに死んでゐる！
この夥しい思考の屍を葬らう
窓を展いて 澄んだ湖のなかへと

Sine qua non

そなたの睡眠（ねむり）は、夜っぴて白く窗を埋（う）める
片脚あげた　噴き上げの鶴よ。

わたしは讀み飽いた「聖ヨハネ祭の夜」の頁
をたたみこんで、暗い一閑張（いっかんばり）の下に、さて閉ぢ

ようとして氣づいた。
その夜、なにせ、季節は冬から孟春に、とび
超えようといふのだ。（くらい天の一方で、間（ま）
遠（どほ）に神々の跫音がゆききする——）

わたしの中のわたしが、しばし恍惚（うつとり）とじぶん
を置きわすれて、往つてしまふ。まづ、それを
とり戻さなければならん。
窺きガラスのなか、東方（ひんがし）が白む頃あひといふ
に、欹てる耳のうへて逸はやく、

——Chio, chio, chio, chio-chinks
　chio, chio, chio, chio-chinks…

暁は迅(はや)い。窗はまだ睡りたりないのだ。
わたしもまた睡りたりん。
歌ごゑは、蠟燭ほどの月あかりの下びに。灌
木のしげみのあちら側に。
どこか「夜啼鶯」とでもいひたいが、——湖(うみ)
どりと覺(おぼ)しいそのこゑは囀きつゞける。張りの
ある、わかい調子で。

（ひょいとヒマラヤ杉を、湖かぜが煽つてと
ほる。ひそひそ噺のかたちで。……）
嚏(くさめ)　ひとつ
ふいに、
わたしの前にゐた曉(あけ)ちかい夜が、ぐつたり息
絕える。
なんといふ　いい夜！
わたしの中のわたしが呟く
——Sine qua non　と。

哀訴

旅館寒燈獨不眠　高適

天の河を斜に抱いて
旅館の門燈のあたりだけ
淡く　仄り開けてゐるやうだ。

（いつたい、どこへ宿れといふのだらう？）

わたしはその下に彳んで
せつせと書き綴る、
——あんのんな夜分のふしどだけは
どうにか　神さま！
お與へください　といふ尺牘を。…

山下町の夜

「灰色(グレイ)一枚でおりてくる冬！」と書いた
「後(うしろ)から足ばやに、私を追ひ越すゆふぐれ」と
も書いた
その冬のゆふぐれが
ぽつぽつ、街燈に燻(くす)んだ灯(あかし)をいれてゐる

——横濱　山下町の、ここから海が展(ひら)けるところ……

たつた一つ、——ごらん、外國商館の屋上の、幽婉な拋物線(パラボラ)が昏れのこつてゐる。（ゆふぐれよ、あれはお前がけふの忘れものだ）夜ぞらをくつきり劃つてゐる明暗。その涼しやかなスカイ・ライン。——まだ早い夜の、まだ星かげうすい空……

碇泊した Empress of Asia が
海へ明るい點燈裝飾(イルミネエション)の灯をおとしてゐる
(そのあたりだけ、海が燃えてゐる)
赤い土耳古帽のせた ひよろながい印度人の火
夫が
烟艸(たばこ)を薫ゆらせてとほる
その後から、青い星を散らす電車のポオル。

わたしは歩み入る、街路樹の鈴懸(プラタヌス)を涵してゐる
闇へ。それはSといふ外國商館のまへで、注文(オオダア)

帳(ブック)の黒の背革よりもくろい。闇に紛れてわたし
はみる、二輪車のいくつかが、闇なかに憩(やす)んで
ゐるのを。——いまや夜が、それを平和な睡眠(ねむり)
のなかへ裹(つゝ)まうとするとき、そのどれもが、圓(つぶ)
ら瞳(め)に肖た灯を點けたまんま……

公園の噴水(ふきあげ)。(孤燈のかげに
夜の鶴をわたしは象(かた)どる
天から墮ちた純白のマダム・シゴオニュ の扇)

ゆふあかりの青黛が仄のり匂ふ。あの自轉車置場に、囁き交してゐる地上の參星（オリオン）。いみじい、だが、草かげの鬼灯ほどしかない、これらの星たち！

孟春

「月夜の園の鶴夫人（マダムシゴオニユ）の扇」（多木胖「噴水」）

ねむりのうへに、ゆるい霜がおりた。霜の粉（こな）。それから、音樂のきれはしがおりた。ちかちか光りながら。淡い夢のつばさが、きれぎれになつて吹かれながら、そっとおりてきた。

ねむりがたち去ると、いれ替りといはんばかり、わたしのポケット、そこの窓帷のうらで、あるはパイプの胴、あれこれと視野いちめんに冷酷な冬がつまつて、冷酷な冬が、——ガラスの破片のやうに尖りながら、花さいた。軋りあひ、鬩ぎあひ、まだ、冬がたたかひ遺されてゐた。

——ちらと見てとつた。春が、ほほけた提燈

をさげて、あしさぐりで、やつてくるところ、

……

けふ、逈かな噴き上げのうへを、一双の鶴が身をひるがへして、夜明けの方へと消えた。ただ、それっきり。だが、そのこゑだけが、ふしぎに黄塵のやうに、ざらざらと心にのこつた。

弾く人のゐない夜

弾く人はゐない。
室は冷かに、澄んでゐる。動かぬ。

動くものが欲しい。
ただひとつ、動くものがゐる。あそこに……

ピアノの胸のあたりで、夜は頭をふつてゐるメ
　トロノオム、
おまへの微韻だけが、そつと夜をゆさぶる。
睡つてゐる透明な靈衣、
百蟲譜、
白體の蛾、
わたしは愬へるやうに、眠りからたちあがる。

なにものかの聲が囁く、
「――なにせ、秋だ、聖壇の大蠟燭のやうに、
ちらちら、感情の膜が耀ひながら微動する」
と

花が崩れ、水晶の時計に肖た秋が
かうべの後ろ側で澄んでゐる。

雪もよひ

寒い。

わかい齒科醫のもとへ　一句
「齒石はづす　夜の皓さに
睫毛鳴る」とかき送つて

その夜、まつしろいものに埋(うま)つて寢た。

寒い。

青い視野の奥のはうで
鵞ペンは、わたしの鵞ペンは寢たやうだ
行燈(あんどん)まがひの卓上電氣(スタンド)も　もはや　眠つたらしい
それから　わたしの子供も　句帖も。

ところで

のこつた、眠らないのがただひとつ
膨らんで阿呆のやうな、きたならしい、このひ
　だりの胸の哀求律(あいぐ)。

寒い。

夜のからんからんからんに乾いた空氣の、その底で
うつかり　咳(しはぶき)をとりおとすと
發止！
それは青く火を發して　鳴つた。

雪

雪は紋をつくる。鼓の、あふぎの、羊齒の紋。
六花。十二花。砲彈の紋。

江州ひこね。ひこね櫻馬場。さくらの並木。

すつぼり、雪ごもりの街區。

星のうごかぬ、八面玲瓏と煙り澄んだ、銀張りの夜。

早寝の牀で聽いてゐる。……プラスティックな宇宙のしはぶきを。（このとき、地球は鞠ほどの大きさしかない）

微睡の睫毛はみてゐる。……圍爐裏に白くなつた燠を。（それが、宛らわたしの白骨、燒かれた殘んの骨に似る）

燠に化つた梢の呟き。――わたしの脊椎を外し
とつてする「洗骨式」を、……でなければ、
肉體の髓を焙きつくしてする「風葬祭」を、
……そんな末枯れた夢見もするわな。

老來の、炬燵に眠りたまへる母上よ。
あなたの鬢にも、雪がある。

てがるな綠化季

六月です
ちちははよ
窗したの疎林で、郭公鳥が啼いてゐる。
夜間中學の副讀本なんかの詩で

よく邂逅ふ、——CUCKOO といふ禽、
（あのこゑは　いまや初夏のひかりを浴びる）
わたしは截る　淡茶いろの竹針
それに
一圓半の CUCKOO WALTZ を唄はせよう。

あの
葉綠素のかつぱつな輕井澤では
へんに
ひとは白つぽく

時間はかたむいて　明るい……
（リルケが歌つたやうに）

てがるな綠化季ですね
ちちははよ
はて
わが胸の枝々で　郭公鳥が啼いてゐる。

つばくろ

雨………

門を暗くして、ひとは潜る。昆蟲はゆき、また
かへる。門を暗くして紛れ込む雨伯のたぐひ。
——このグリィンを濡らした、微粒の賊！

ことし首夏。まだわかい燕のつがひが巣くつた
門。
ひもじい愁ひをば靈臺に薫じて、門を潜り、ひ
もじい愛慾の層をば、身うちにかき濁して、
グリィンにしぶく雨に濡れて出る。

雨………

美しく蓑と傘とを棄てた。

晴ればれと、かへる燕。雨のなかに、汚れた道がけぶり、道の見付に、亭い門。その門を凌ぐ一双の菩提樹。いな、身の薄いひもじさに悶えながらに、ひとがをり、そのひとの後ろのグリィンに、やはり、門を暗くする雨が煙る。

雨………

門を翔けぬける、一羽の燕の、飜轉。その姿は緑海に消える。（わたしも飛び込まう。燕よ。とめだてしないでおくれ。あのさむく黝んだ葉緑の海の、ただなかへ！）

鶯

去年(こぞ)の雪いづこ

かの夜半(よは)の
ねざめに　あをき　窓玻璃(はり)に
散りこし粉雪(こゆき)
いづち　ゆきけむ

茅蜩記

一

比叡のなだりをくだり、うぐひすぶえとまをすものききはべりしか。いまだくわぶんにしてひぐらしぶえ、耳にいたせしことこれなくそろ。

短日幽居のなぐさに、さればひところゑ、きかまほしくとはぞんじそろ。

二

偶來松樹下　高枕石頭眠
山中無暦日　寒盡不知年

大蔵の暮れのひそまり、それは草臥れた心をたてかけるためにいい。「山中無暦日」といふ

詩句、そのなかに、わたしは栖んでゐる。山中の温泉。湯はあふれ溢れて、あけくれわたしの孤獨を煖め、……

いましがた、湯殿への渡廊下で、わたしは一片、白いものに觸れた。雪をのせた濶葉樹の落葉でないとすれば、匂ひをたたんだ、銀木犀の花びらの一片にちかい。外の雪あかりにすかしてみると、大晦日の三十一と書かれた亞刺比亞數字が、顫へるやうに、その白さを汚してゐた。

ふつと思ひかへしてみると、もうこの歳も暮れるにちかいことが、まざまざと甦つた。山中無暦日。——暦日のない旦暮に、遙かに標立つものの白さが、身に沁みてきた。

湯に涵つて目を瞑つてみると、その暦の白いおもてを、氣ぜはしく、年のうちすぎる跫音が、聽きとれる思ひがする。——内湯におちる湯の音。——玻璃にさらさらと肌ふれて、闇に沈んでゆく、鹽のやうな粉雪。耳をすますと、裏山

を越える木枯のかぜの一枚が、颯と幅ひろに、けものの吼えるに肖た叫びを、おろしてきた。庭樹が鳴る。小禽の凍（こご）えるやうな音（ね）もそれに交る。そのなかから、ひと色、かなかなかな、——茅蜩（ひぐらし）のこゑ。……眞冬の雪の夜に、はてな、それは雪を透して、腦の芯に、錐（きり）もみをいれるほどにつんと澄んで鳴る。かなかなかなと、高く冴えて、とほく、淡く尾をひく。「ちちよははよかなかな鳴くよ日のいりの亭き木（こ）ぬれにひとつ鳴き澄む」——じぶんの書いた歌が、そのこ

ゑの下から、急に泛んだ。つづけざまに、またひとつ。……「かなかなは鳴きのうつりに日のいりの合歡（ねむ）の木かげのベゴニアの花」

そのこゑが、はたと途絶えると、遽かに落湯の音。木枯のざわめき。身をかへして、わたしは一度ひらいた眼を、また瞑る。……

野

蟋蟀堂にあり、歳聿(つひ)にそれ莫(く)れぬ　―國風

——あれだ。

ドオデエも「風車小屋だより」のなかにかいておいた、あの蝗(いなご)の大群。……こいつは、まつたくあれに似た凄じさだ。天日を陰(くら)くして甍々

とむらがり飛ぶ、斯螽。索々と鳴る、その翅音。耿々とひかりうすれる、落日。さうだ、そのなかをとぶ神杖。酒袋。あゝコップ。

一天の景(かげ)は、寒く、こころを憑(の)り乗(さ)つて、歎きの科(しぐさ)を強ひる。——わたしはその群る蟲に、その蟲の歌に、汎として泛(う)き流れるサモス派の船である。……

鶯

夜更け。

暖爐のめぐりの、あのあかるい溫氣。

けきよ、けきよ、けきよ、けきよ。その溫氣のなかを、籠から、鶯が啼く……

すこし酸味のかつた終電車の軋り。外では白

い黴粉が片明りして、軒のあかしを朧ろに、それが、なにか十二月だといふ身についた落ちつきで、靡いてゐる。——なにかを、鎧扉に囁きながら。

暖爐のうへの硝子時計。

壁の一角に磔刑られて、そのまんま年老いたマリイ・マグダレン。そして、その肩さきの、雪。

けきよ、けきよ。……鶯の啼くこと、ふたこゑばかり。恍惚となる閑けさ。——聖母像はゐ

ない。架上の基督(クリスト)だけが、弱々しげに咳き込む。
（けふは、あなた、クリスマス・イヴなんです
よ）紅茶のスプンの「ちん」と鳴る音。——
　澱んでゐた夜が、その音に思ひついて、せつ
せと闌けてゆく。風信子(ヒヤシンス)のあさい欠伸。

けきよ、けきよ、けきよ、けきよ。
鈴懸(すずかけ)並木のあちら側では、雪の道を拾ひある
きに、——鶯の口倣(くちま)ねしながら、それ、誰かが
あるいてゆく……

すでに年が老けて……

まくらの草子に出る　蓑虫よりは見窄らしい
あの蝦(えび)と蜘蛛の混血兒(あいのこ)みたいなやつさ
もう流しもとの暗闇(くらがり)で
——つづれさせ　ころもさせ
おつつけ秋もをはりだと　あいつがわたしに告

げる

白秋は砂糖のこなが眼に沁むと、歌つた
あの夜ふけの灯の下
ひよっこり　蹇の促織が罷ん出て
——ちりり　ちりり
糸のすり切れたヴィオロンをきかせる季だ……
「ヴェルレェヌよ
今年の秋も　めつきり老けた」と

あの虫が「古詩十九首」のなかでは
月のあたつた荒壁のうらで　鳴く
——さむいほどだ　思つても氣がとほくなる
それが茫々たる　なん千年の曩昔のこと
やつぱり詩人に
かうして老けた秋を告げてゐたんだね　あいつ
は……

八十八夜

寝いり端の小耳に
蚊ひとつ
ぷぅんと鳴きついて　哀れっぽく訴へてる
かた手間に「歳時記」をのぞいてみる

「農家　耕ヲ首ム
立春ヨリ八十八日　マタ春霜ヲ置カズ
茶摘ミハ眞盛リ　養蠶ハ初眠ノ頃」

ゆふ窗におく　手燭ほどの月あかり
そのなかに小粉團の匂ひ
または　むやみと
幟の滑車の　から鳴り
遠音に　きりり　近郊電車のせつかちな軋りかた……

ぱらぱらと　夜かぜがきて
卓子(テーブル)の辭書をめくる　すると「Candlemas」と
出た

聖燭節　さうさう　二月二日
ちらちら　紛雪　しばたたく燭臺の燭と
祈禱(いのり)のこゑと
それに（映寫幕(エクラン)のうへの
マリア・シヤプドレェヌの雪）

それらがさつと掠(かす)めて　遽かに夜冷えがくる
腦の芯に白つぽいものが　いつぱい

蚊の哀訴　それもすでに止んだ
ときあつて風がもつてくる
――夜學の咿唔(いご)の尾が
ひとすぢ　微睡の耳にじやれつくだけ。

年の徂徠

いま燈火は、弱弱しげに、細まる。
乞丐のやうな十二月が
見窄らしく扉に銜つて、わが家の角を折れて
いつた。……二足、三足。

そつと、闇のなかにと降りてゆく、年の背。
そのあとの空白を、粉雪が性急にやつてきて
埋めつくす……

午前零時、たつたいま、
痩せこけた年の詩神は、息をひきとる。あゝ
古ぼけた破れ帽子のやうな年が死んだ。
――偃鼠に似た、暗い憶ひ出と一緒に。

睡りかけた鳩時計が唄を歌ひだす、

ぽつぷう、ぽつぷう、ぽつぷう、
（それ「萬有回歸」の軌道が軋つてゐる）
わたしは唐艸模樣の外套を羽織つて、
それから、雪のなかへと索めに出る
やつてくる年の
——さりげない火種を乘りに。

海へ

海へ、一日。

しこたま夏の陽を仕入れて、日の暮れがたに還つてみると、わたしの生地の肌がかう呟くのだ。「なんとよくもこれだけ掏りかへられたものだ」と。

夜、絲爪棚のかげで一風呂浴びる。
すると、どうだ。現像液に涵した乾板のやうに、わたしの生地の部分が、みるみる泛びあがつてきた。

ブラウンと白とで出來あがつた、だんだらの斑。
この半白の「肉體寫眞」のうへで、一日の太陽の歩みを、——假借なく灼きつける、その炎

の歌を、まざまざと讀みとることができる。

夜は夜で、この太陽の火傷が、わたしをひと晩眠らせない。

河

石の橋　寒く彳んで
わたしは獨語する、——おもひぞ屈する河」と
その河ふところ　煤けた沒り日をば泛け
灰だみ　かき濁る　都會の河

逶迤（あい）として眠る河
この河、ま二つにかきわけながら
このゆふべ
遠ざかつてゆく　ひとつの白堊の汽艇（ランチ）
（わが胸に消えてゆく　ひとつの思惟…）

石の橋　寒く彳んで
わたしは獨語する、——河、わたしの内方（うちら）に
も河がある」

からす

ラフカディオ・ハァンの「ほとけの畠の落穂」を眺める。その一節をわたしはノオトする。

（私が一個人――一個の魂！　いな、私は一つの群集である――幾萬兆といふ考へも及ばぬほどの夥しい群集である。私は時代に時代を

重ね、劫億に劫億を積んだものだ…）

このくだりで、わたしはハァンのなかにじぶんを、またじぶんのなかにハァンを置いてみた。その空隙をふさぐ幾億兆の群集。――わたしは「ほとけの畠」の、あの目こぼれを啄む、一羽の禽に、どうやら肖てきてゐる。しかも、零落れた一羽のからすに。

孤節わけ入る山

やってくる男

あと一日の九月が　一瞬に
濁つた珈琲いろの雨の中に沈んだ
雨水の灌糞
沁みる
傘

軽尻(からじり)の性根を雨に洗つてゆかう
溝水のひびきは現象の悲鳴
けふ　わが卓子(てえぶる)のうへに
きのふの「歌」と「非情」と「凡心」の窒死…
暗闇から
初秋の傘の匂ひがジンと沁みる

重い感覺は　昨日の室に
あの鍵の音と倶におさらばとしよう

未來にかゝはりのない　生理は
一切合財　この傘の
あたらしい背を闇に飛ぶ　このしぶきであれ
まさに　現象の秤(はかり)のうへで
貪婪に
「今日」と「昨日」とが撓(しな)つてゐる！

あたらしい傘
あたらしい雨
その一日の「夜」に約束される明日(あす)

九月の冷冷しい雨にぬれて
夕ぐれになれば
シュルレアリストZ・Iがやつてくる

獨白

高祖保よ　おとがしてゐるしづかな昏れのおりるおと

高祖保よ　この餘の不幸はふたたび爾にいでて爾にかへらう

高祖保よ　おまへの耳が聴くのは「室内樂（カメラムウジカ）」だ
けだ　そとはかいくれ闇

高祖保よ　おまへの背ごしに　半圓の月が淡す
ぎる……

高祖保よ　頭（づ）の鉢に植ゑるがいい　四季咲きの
薔薇（うばら）一輪　その匂ひがおまへの臭みを
消す

高祖保よ　伐木丁丁　鳥鳴嚶々　春めいたな

高祖保よ　手をさしのべよ　やがて双手は十方
無礙の大千世界をさす

高祖保よ　とんぼかへりしてみろ　下下（げげ）の天地
へ　このとき還るのだ　なまなましい
荒けづりの樸（ぼく）に

高祖保よ　にんげんに傴拊（うふ）するより　ぞつこん

おまへの精神に　それを！

高祖保よ　擦(おさ)へよ　揚るべからず　訾(はか)つて　謫(しか)るべからず矣……

高祖保よ　モノクロオムを看るだけの目ならいらぬ　あの青黄黼黻(ほふつ)の觀にあづかるがいい

高祖保よ　窓のそと　枯芝に日かげ　石に心

かぜ凪いだやうす

高祖保よ　すきな文句、——汎たるかの栢舟、汎としてそれ流る！

高祖保よ　蟻のかげだね　蟻のかげ

高祖保よ　遠近法(パアスペクテイヴ)がくるつてるんでせう　その色盲　さしあたりこまりものだね

淡彩

1

ひと冬、咳きこんでゐた公園の噴水(ふきあげ)。いまは
枯れがれにおとろへて、春の日ざしを浴びる。
そこから、なにの言葉も聽かれない。
噴水(ふきあげ)のうへを斜(はす)に、――鶺鴒まがひの痩せた

小禽がひとつ、青磁いろの一線を曳いて、さむ
くおちていつた。なにの言葉ものこらない。な
にの囁きすらも。――去つてゆく冬の使節、い
まはこゑを嚥(の)む歟(か)と。

2

並木路は、まだ芽ぶかぬ白楊(ポプラ)。
その首のめぐりはいつせいに痩せて、ほんの
ちよつぴり、冬の襟卷(マフラア)に肖た雲の片(きれ)はしをまと

つてゐるといふだけ。この灰いろの襟卷。ふゆの遺產。——そこに、まだ春のことぶれはとほい。道ゆく犬も、子供を載せた乳母車も、その乳母車ひく母親も、われとわが影を踏んで、あるいてゆく……

3

廢館になつた領事館のまへで折れて、海へおちる道。——あをく摺(たた)まれた海の夢が、とほい

倘怳(あくがれ)を乘せて、萬里の潮を、しろくあげてゐる。ゆふぐれを背負つて、その坂のうへから自轉車に跨つた、臙脂(えんじ)いろのワン・ピイス・ドレスのをんなひとり、身をひるがへすやうにおりてくる。——おりてくる自轉車。跨つたものは、すでに一個の、無心の物體である。もし、さうてないとするなら、あれは、冬の石女(うまずめ)にちがひない。

4

ヒマラヤ杉のうへに、日ざし弱い、ま晝の太陽がやすんでゐる。雀一羽すら、そこへはやつてこない。おしだまつて、ものに倦んじた時のながれが、目にみえぬ迅さで、逃げてゆくだけである。

　ヒマラヤ杉の下のベンチ。目なれた浮浪者のかげすら、そこへやつてこない。氣おちした、

老人の精神が、トゥルゲーニエフの散文詩ふうの外套をまとつて、そこに腰をおろしてゐるだけである。——全く、まつたく、それは、わたしが置きわすれた詩の、うらぶれた（殘像）のすがたであると、告げたい。

「孤笻わけ入る山」

四月十四日

元住吉の野なか、車中からわたしは一羽の鵲をみとめた。痩身長脚、羽根は霜を浴びたほどに白い。——亭い野の欅にとまるとき、

それは樹をひきたたせる頭飾となつた。中空に漂うて、それは一點の白、高雅なアトムを撒きちらしてゐた。（いちど「靜」のなかで羽根を憩うた、あの「動」の相で…）

四月二十一日

田中冬二さんより來翰。

麥の穗擦れの風が、海のやうにきこえるとあり、また日の暮れがたは、遠蛙がきこえる

とも書かれてゐる。

四月二十四日

わたしの詩集に、荘厳（しやうごん）といつたものは需めまい。同時に綺羅をも。よしんば需めるとして、あの晩ざくらの群落の、——なにかかう火山灰に似た、白いうす濁りが漂つてをればよい。

五月八日

「詩經」をのぞく。太古にあつても、やはり昆虫は季節の指針をなして、月のうつりを象徴してゐたらしい。

（五月、斯螽（ししゆう）股を鳴らし。六月、莎鶏（さけい）羽を振ふ。七月、野に在り。八月、宇に在り。九月、戸に在り。十月、蟋蟀わが牀（ゆか）の下に入る）

襟すぢがへんに寒い。ひる寝のなかで、牀（ゆか）の

下からやつてきた蟋蟀の、ながい脚に、踏んづけられた夢をみて、さめる。
　多喜氏から「近江だるま」が届く。

五月十八日

　五月どきの蕭やかさのなかで、あの層のふかい、漆黒の闇の肌ざはりがしたしまれる。すいはく、闇中孤坐。……そのなかへ、いつぽんの蠟燭を樹てる。蠟燭の炷がけぶる。まて

まてけぶるのは炷でなくて、わたしの孤獨でこそあらう。孤獨の思量。
（孤獨は、ちやうど燃えおちた炷から翔びたつ、孩な灯取虫のごときものであらう）
臺灣へおくるための、詩一篇。
ぽつんと紙へ題だけ落として、筆を剪る。

――「孤節わけ入る山」

七月

アスパラガスが、黄いろい紙屑ほどの花をつけた。その隣りあひに姫胡蝶花(ひめしやが)が花をひらいた。それに連ねて、山百合も一輪。そのとなりに

淡くれなゐの四季咲き薔薇が、ほんのちよつぴり、これも花をつけてみせた。そのとなりに、おおそれらを培うた張本人が、傲岸に、けさそれらを見おろして立つた。それがそれ、——わたしだ。

六月

夜っぴて雨ふる。雨のあひま、川のはうへおりてゆくと、夜振の灯がみえる。

夜振の灯。

樹の下

わたしの詩集に、この句を入れることにきめる。

題は「樹の下」——

涼しさや　松の落葉を　つんでゐる

冬蝶

あれ　GOIDZUKI のさきの　冬ざれの花、一輪

＊GOIDZUKI　木製雪掻き（彥根）

草店月初冷

あはれなるかな　わが　咳嗽のかげ
淡月に霧らへり、さあれ
　岸の、草廬
　軒の吊り燈籠のうへ　湖なみの
　　　白じらとかかり…

くれなゐ

目覺めると、庭芝のうへ、やはらかな雨が降りてゐる。目にしみる、いろどり。睡つてゐる芝艸。——みてゐると、ぽたり、それへ凌霄かづらの花がこぼれおちた。綠中一點紅。（これで何がな、風景に彩が生じた）だが、芝艸の睡りはさめるとしもない。

呂律

ふるい革袋に　あたらしい酒
あたらしい革袋に　ふるい酒
あるひは　古い革袋にふるい酒
あるひは　あたらしい革袋に　あたらしい酒

「落葉哀蟬曲」を讀む人

五月四日

蠅をたべた夢をみる。

滿身創痍、凍夜の野に、山のやうな蠅に埋れながら。――だが、濠洲の神話にでる Man-

garkunyerkunya といふ神さまは、生のまんま、蠅といふ惡魔の子を召しあがるとのこと。(よしこの故事が、へんな夢を、譯ありげに紛飾させてもよんどころないことだ。……)

五月五日

澄んだ机のうへに、古備前の壺が一個。これは父の遺品である。そこに「落葉哀蟬曲」をよむひとがゐる。

…虚房冷而寂寞。落葉依于重扃。

支那の落葉。歳老いた武帝。淡い夢のほとぼりが、そこから、薫ずるやうにたち昇る。

九月八日

わたしは、この雑駁な、とりとめのない日記をつけることに、堪へがたいまでに心を訶(さいな)ま

れてゐるやうだ。むしろ、この内部的な感情の闘ぎが、筆を抛つことを拒んでゐるのだともいへる。

不潔な精神界の泥沼。

十一月三日

兒が泣きだす。强靱な生誕第一聲。

コクトオ流にいへば、空間をかきむしり、眼にみえぬなにかを捲りとりながら。

十二月一日

眺めてゐる。たとへば、ピアノのうへで、隻脚を振つてゐるメトロノオム。その律氣な退屈さが、たまらなく、わたしの平和を搖さぶるのだ。（死んだもおなじい、溫室咲きのやうな平和を。）

このとき、素迅くつぎの一句が、わたしの双のたなぞこにのこる。ストイックふうのひびきをたてながら。わたしは、まさしく不意を衝かれた。

（力を盡して窄き門より入れ……）

和蘭陀石竹のかげに

一　ペン

ペンをとらなければならない。ささくれたペンを。孤獨がわたしに命じた。書け、と。あの五月の闇の薫やかさのなかで書いた、いくつか

のもの欲しげな、獨居の詩。辛うじて、それでも書きとめてきたのだ。わたしは。——「天使園の薔薇」だの「乖離」、「哀訴」だの、それに、「Sine qua non」だのと。

（しかしそれらの中に沈んでゐるのは、孤獨の滓ではない。ひどく華やいだ、むしろ孤獨怡悅の神の、——隱微な擬態だつたやうだ）孤獨よ、これは宥せ。

二　檢索

かりに額に掌をさしあてて、呟いてみた。

……「百舍重趼して來る」

すると孤獨は、そのやうに、遠方にあると思はれもする。孤獨は鹹っぱくて、岩鹽かなんぞのやうに手荒くある。實驗室の甘汞よりも、もつと白いものであるかもしれぬ。――ゆふぐれの中で、求道者の匂ひの漂ふ、和蘭陀石竹。翳つた邈漠たる、その色。そこらあたりに、ひよつこり

佇んでゐるのかもしれない。孤獨は。

愁ひに、詩のなかに姿をおとすときは、はなはだ書割のとぼしい、間違な姿の、うそ寒いものばかり。わたしの孤獨よ。（おまへはそれに似てゐる）

三　烟草のから

水に涵つた桃林を、人は雨外套の襟をたてて足ばやに、暗いはうへ消えていつた。

その後姿に、薫ゆらすとみえた、紫煙のけむの一片。それが白い。ぽんと、抛げすてられたその殼。地におちて、なほ燻る餘燼。――もはや夜の大地が、こんな小つぽけな烟草を薫ゆらせてゐると、みえないことはない。

もくろく

Sine qua non

乖離 …… 五
みづうみ …… 一〇
Sine qua non …… 一四
哀訴 …… 一八
山下町の夜 …… 二〇
孟春 …… 二五

弾く人のゐない夜 …… 二八
雪もよひ …… 三二
雪 …… 三四
てがるな綠化季 …… 三七
つばくろ …… 四〇

鶯

去年の雪いづこ …… 四七
茅蜩記 …… 四八
野 …… 五四
鶯 …… 五六

すでに年が老けて……五九
八十八夜……六二
年の徂徠……六六
海へ……六九
河……七二
からす……七四

孤笻わけ入る山

やつてくる男……七九
獨白……八三
淡彩……八八

「孤笻わけ入る山」……九四
七月……一〇〇
六月……一〇二
樹の下……一〇三
多餘……一〇四
草店月初冷……一〇五
くれなゐ……一〇六
呂律……一〇七
「落葉哀蟬曲」を讀む人……一〇八
和蘭陀石竹のかげに……一一四

詩集 雪

昭和十七年五月一日印刷
昭和十七年五月四日發行

定價・三圓

著作並刊行者 東京市大森區田園調布三ノ三七八 高祖保

發售 東京市品川區大井庚塚四九二八 文藝汎論社
振替東京四三五九八
電話大森二一七五

東京市京橋區築地一ノ六
印刷者 土井儀一郎
製本者 下田金藏

916
9

終